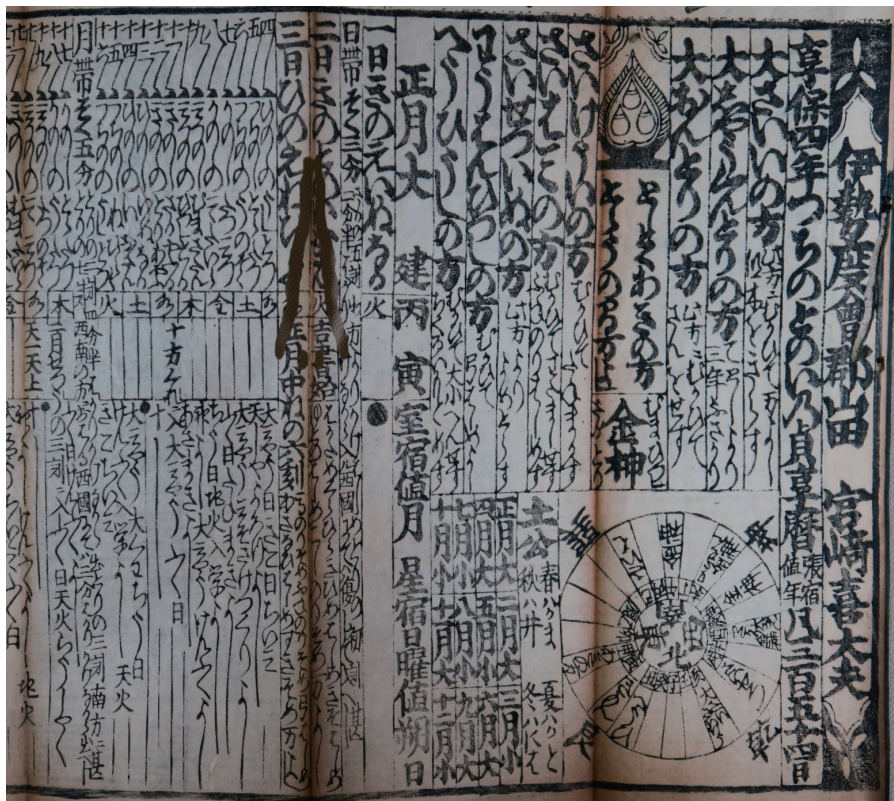


江戸時代の暦（伊勢暦）



* 小田家文書（柳井市金屋）護符896「伊勢暦」

解説

写真は、初めて日本人（渋川春海）によって編纂された暦である貞享暦（1685〔貞享2〕年に宣明暦から改暦）に基づく伊勢暦です。伊勢暦は伊勢の御師（おんし。伊勢神宮へ参詣者を案内し、参拝や宿泊の世話をした）が伊勢神宮の御神札とともに配ったことから、全国に広がっていきました。右から暦の発行者（伊勢外宮宮崎喜大夫）、年号と日数、八将神や歳徳神の方角や吉凶、月の大小に続いて、正月から各日の日にち・干支・十二直（その日の運勢）・納音（なっちん。干支を木火土金水の五行に分類した運勢）・節・吉凶などの記載が続きます。

江戸時代の和暦は貞享暦以後も宝暦暦・寛政暦・天保暦と続き、1872（明治5）年まで使用されましたが、いずれも太陰太陽暦で、暦日は月の満ち欠けに基づいていました。季節の運行とのズレが生じるため、閏月が挟まれる年もありましたが、農業等はいわゆる二十四節気（太陽暦由来の、季節の変わり目となる日）や雑節に基づいて行われました。写真の正月三日にみえる「正月中」（雨水）や正月十八日の「二月せつ（節）」（啓蟄）などがそれにあたります。

* 当館の小田家文書（柳井市金屋）には、写真にみえる1719（享保4）年から1867（慶応3）年にいたる82冊の伊勢暦があります。